

市長記者会見記録

日時：2026年9月4日（金）14時00分～14時25分

場所：本庁舎2階 記者会見室1・2

議題：市政一般

<内容>

【市政一般】

《大都市制度について》

【司会（報道）】 ただいまより、定例市長記者会見を始めます。本日の議題は、市政一般となっております。それでは、早速質疑に入ります。

まずは、幹事社様からよろしくお願いいたします。

【東京（幹事社）】 幹事社、東京新聞です。よろしくお願いいたします。まずは、昨日の話で恐縮ですが、東京都内でやられた特別市の会見についての、市長としての手応えというか、都内のほうの記者の反応と、県からもまた反論が寄せられておりますが、改めて、それに対する市長の考えをお伝えください。

【市長】 ありがとうございます。日本記者クラブのところで、講演、そして質疑が行われて、オンラインでの参加も含めて大変多くの全国のメディアの方々に御参加をいただいたということは大変ありがたいことだと思っていますし、特別市の意義というものについて広くお伝えできたことは大変有意義であったと思っております。こういったことを繰り返し、理解を求める取組というのは、メディアの皆さんだけではなく、経済界や、あらゆる団体、市民の皆さんにしっかり伝わっていくこと、あるいは政令市ではない方々にとっても大変重要なテーマだと思っていますので、そういう方々にもしっかり伝わるように、これからも努力していきたいと思っています。

神奈川県を受け止めは、報道を通じて今日も新聞で拝見させていただきましたが、何ていいでしょうか、いつもの感じかなとは思いましたが、私としては、しっかり冷静に、これまでどおり議論していきたいと、制度論としてまともな議論をしていきたいと思っております。

以上です。

【東京（幹事社）】 重ねますが、すみません。3市が発表した試算では、川崎市のみ90何億円のプラスになるという評価をされていて、その上で、市長は昨日、川崎市だけがよくなる制度ではないということもおっしゃいましたが、これ、はたから見るとそういうふうを受け止める方が多いのは事実だと思います。この辺の話をどのよ

うに払拭されるというか、説明をされていくお考えでしょうか。

【市長】 まず、3市で出しているシミュレーションなんですけれども、ある一定条件の下で試算した場合にはこのようになりますということの、ある意味、議論をさらに加速させていくための一つの資料だと捉えていただければと思っています。

何よりも、昨日も申し上げましたけれども、川崎市だけではなく、全ての自治体にとってこの制度が有意義なものであるために、そういった制度設計をしていかなければならないと思っています。例えば財政的な話にしても、過度な偏重というものがあるとすれば、それをどのように是正していくのかという制度をつくっていくためには何らかの試算が必要なわけで、そういった議論にもつながるシミュレーションになったのではないかと考えています。

繰り返しになりますけれども、この特別市制度というのは、これからの人口減少における自治体運営が持続的にできるようにどうやって最適化していくかということの一つの制度と思っていますので、そういったところにつなげていきたいと思っています。

《川崎市差別防止対策等審査会について》

【東京（幹事社）】 ありがとうございます。ちょっと質問変わります。先月下旬に、川崎市の差別防止対策等審査会、第4期目が始まりました。この中で、審査に上がってきたのが9件だということで、吉戒会長は、ちょっと少なくなったのかなということを感じておっしゃっていました。条例の対象外の相手も増えてきたのかもしれませんが、ただ、そういう差別的な言動が減っているわけではないということもおっしゃっていました。

これに併せて、市の条例改正とか、市も対策を見直していくという考えは市長にはありますか。

【市長】 条例を改正したり、あるいは何か新しいものをという考えは、現時点で持っておりません。

一方で、これは九都県市でも要望させていただいておりますけれども、インターネット上の、いわゆるヘイトスピーチ、誹謗中傷というものは、過去から見ますと件数が増えてきているという傾向にありますので、それについては、インターネット上という性質上、国としても真剣に受け止めていただいて、必要な対策というものを取っていただく必要があろうかと思っています。これは1自治体にとどまる話ではございませんので、ぜひこういったことも継続的に働きかけをしていきたいと思っています。

【東京（幹事社）】 ありがとうございました。

《いじめの重大事態に係る調査報告について》

【共同（幹事社）】 すみません、幹事社の共同通信から御質問させていただきます。先週、市立中学校でいじめ重大事態があったという調査報告書が公表されました。報告書の中では、学校が早期にいじめの深刻さを認識できずに、市教委との連携不足もあって対応が遅れたとの指摘がありました。川崎市では、これまで十数件のいじめ重大事態が認定されているとのことなんですけれども、その中で今回のような対応遅れによるいじめの認定というのがありましたけれども、市長の受け止めと、今後のいじめ防止において、市としてどういう姿勢で臨んでいくのかというところに関してお伺いしたいと思います。

【市長】 ありがとうございます。まず、今回の報告書では、今おっしゃっていただいたとおり、学校の初期対応ですとか、組織的な情報共有、そして、教育委員会との連携に課題があったと指摘をされています。ぜひこうした指摘を教育委員会として真摯に受け止めて、改善に努めていただきたいと思いますところでは。

《横浜市長の辞職について》

【共同（幹事社）】 ありがとうございます。あと、これもちょっと先月の話になるんですけれども、28日に横浜市の山中市長が辞職を表明されました。これまで、特別市をめぐる議論など、様々なことで膝を突き合わせてやり取りをされてきて、いろいろ協力もされてきたと思いますけれども、改めて、福田市長として、山中市長とやってきたこととか、どう振り返られるというか、受け止めをお伺いできればと思います。

【市長】 隣接している都市として、また、横浜市とは様々な事業を一緒にやってきた、ある意味、一緒にやってきた仲間として、こういった形で辞任に至ったということとは非常に残念であります。引き続き、どういう形であっても、横浜市とはしっかりと連携をして、必要な取組というものをしっかりやっていきたいと思っています。

【共同（幹事社）】 ありがとうございます。加えてなんですけれども、今回の辞職について、何か福田市長に個別に山中市長から連絡など、そういうのはあったんでしょうか。もしあったなら、どういう話をされたのかということについてお伺いしたい。

【市長】 いえ、私には個別の連絡はございません。

【共同（幹事社）】 分かりました。幹事社からは以上です。

【司会】 それでは、幹事社様のほかに質問される場合には挙手をお願いいたします。

産経新聞さん。

《市立高校改革・高等専門学校の設置について》

【産経】 産経新聞です。前回の会見のときに高専の話が出たかと思うんですけれど

も、市立高校全体の改革案というか、改革の方針も出ましたけれども、改めて、市立高校の意義、県立高校とか私立とかあって、また、高校の無償化とかという状況の中で、市立高校の意義というのも、今回の改革、計画の中で検討されたということなんですけれども、市立高校の意義とか、今回の改革で期待するところとか求めるところはどのようなところなのかをお願いいたします。

【市長】 市立高校として、一般的に言うと、一般市で言うと県立高校1本ということになりますけれども、あえて川崎市立高校というものをつくって、これまで有為な存在を輩出してきたという意味では、それなりの非常に意味があると思いますけれども、この時代の流れの中で、様々求められているものは変わってきていると思います。そういった意味での、時代に合った、あるいは環境変化、これからもっと環境変化が厳しくなっていますし、最近の例で言うと、高校授業料の無償化の話というのは、公立高校に大変な影響が起きていると。

そして何よりファンダメンタルなところで大きいのは、子供の数が減っているということからすると、どういうふうにもこれからも選び続けられて、そして、川崎の子供たちに、これまでもそうでしたけれども、これからもいい教育をし続けるのかという観点から、必要な見直しというものが必要なんだろうと思います。そういった観点から、今回、市立高校改革というのがそれぞれの高校で示されてということで、方向性としては非常にいいものになっていると私は思っています。ぜひこれからも、いろいろな御意見、市民の皆さんお持ちだと思いますので、しっかりと議論を進めなければならぬし、教育委員会としても、広く皆さんから意見をしっかりといただきながら進めていく必要があるかなと思っています。

【産経】 ありがとうございます。

【司会】 そのほか御質問いかがでしょうか。

神奈川新聞さん。

【神奈川】 神奈川新聞です。私も市立高校の改革についてお伺いしたいんですけれども、現在、川崎高校に福祉科があると思うんですけれども、その生徒さんたちは、中学の頃からもう福祉の部門に関心を持って、そちらで働こうと思って、今すごく意欲高く勉強されていらっしゃるんですが、今、全国的に見ても福祉の需要はすごく高まっていると思うんです。でも、教育の専門的に学べる場を、ある意味、今回、再編でなくなってしまうというのはちょっともったいないようにも感じるんですけれども、その辺りはどのようにお考えでしょうか。

【市長】 教育委員会としても、その辺りの課題というのは、どうやって福祉人材を

育てていくかということと、市立高校で学んでいる福祉科というものの、いわゆるカリキュラムとその意義というものと、様々な議論があるという中でこういう方向を導き出してきたということだと私は理解しています。そういった意味では、いろいろな見方あるので、そここのところが丁寧に説明されなければならないと、課題としては思っております。

【神奈川】 ありがとうございます。

【司会】 そのほか御質問いかがでしょうか。

読売新聞さん。

《市内における大学の開校について》

【読売】 読売新聞です。今日この後、テンプル大学の開校式典があつて、市長も出席されると思うんですけども、来週には昭和医科大学がキャンパスを鷺沼に新設されると伺っています。大学のキャンパスの新設に何か市としての取組がこれまであったのか、また、大学のキャンパスが市内に来ることへの期待ですとか意義みたいなもの、効果、そういったものを感じているものがあれば教えてください。

【市長】 今回のテンプル大学の誘致については、直接的に私たちが関与したということではございません。当然、市に報告を受けるとかについては関与してきたということもございますけれども。

受け止めとしては、今、宮前区のほうでもインターナショナルスクールの話もありますし、それから、鷺沼のほうでは、今おっしゃっていただいた、昭和医科大学の医学部、薬学部、歯学部も来ると。あるいは、今、市立~~県立~~高校改革の話がありましたけれども、高津高校が国際バカロレアを目指していくという方向から考えると、非常に川崎の北部地域で、ある意味、文教都市という位置付けというのが、より強くなってきていると思っていますし、それは私ども川崎市としても大変うれしいことだと思っていますし、目指すべき方向性の一つだと思っています。

これまでも、2つの音楽大学、川崎の北部にありますけれども、全国の24~~26~~%の音楽専科の方はこの2つの大学から卒業すると、4人に1人ということでありますから、そういった意味で、人材育成の場というのが川崎市にあるということは、持続的な町の発展に大いに資することだと思っていまして、そういった意味では、今日、式典が行われますテンプル大学、1,000人の皆さんが学ばれて、約75%の方が外国の方ということから考えると、実に国際的豊かなことになりますし、この前、事前に学長さんから伺ったんですけども、外国籍の方の約9割は日本で働きたいという希望を持っているということを考えますと、そういった意味で、川崎の産業にも大い

に資するのではないかと大いに期待しているところであります。

【読売】 ありがとうございます。

【司会】 そのほか御質問いかがでしょうか。

時事通信さん。

《大都市制度について》

【時事】 すみません、時事通信社と申します。また昨日の話で恐縮でございますが、特別市の関係なんですけど、私、オンラインでの参加だったんですけども、質疑の中でだと思いうんですけども、水平連携か何かのところですよ、そこで市長のほうで、今、自治体のほうで技術職員が不足していると。それで、これは問題があるので、一括採用とか、どういう仕組みがあるかとかというようなことをお話しされたと思うんですけども、一括採用というところのお考えと、それと、今後、特別市とか大都市制度を考えていく上で、そこら辺もかなり強く強調されていくのかなと。そこをちょっとお聞かせください。

【市長】 分かりました。昨日申し上げた共同採用みたいな話というのは、水平連携というよりも、むしろ垂直補完のほうのことをイメージしてお話しさせていただきました。いわゆる政令市でも非常に技術職の職員を採るのが難しい中で、小さな自治体になればなるほど、やはり技術系の職員を採ることが難しい、1自治体では難しいということになれば、やはり共同で採用していくというものをやっていく。それは、水平連携の形もあるかもしれませんが、基本的には垂直補完というやり方のほうがいいのではないかと考えておりますし、昨日申し上げたかったのは、垂直補完と水平連携というベストミックスをしっかりとやっていかないと、この仕組み、これからの自治体はなかなか厳しいのではないかなと、思っているんです。どうしても、これは世界の動きでもそうですけれども、日本でも、より都市部に人口が集中するということは、近年、数字的に見ても明らかです。そうした中で、どういうふうに、全国津々浦々、行政サービスを維持していくのかということは、今まで以上の工夫が必要ですし、プラスして、昨日お話ししたのは、DXという部分は、やはり5年、10年前から比べると、あるいはこれから5年後のことを考えますと、相当やれることがあると。規模の大小に関わらず、基礎自治体というのは同じ業務をやっていますので、そういった意味での助け合い、水平連携というのは、可能性というのはさらに広がるのではないかなと、思っていますので、こういったところをもっと深めていかなければならないと、思っていますし、それを仕組みとしてどうやって作り出すかということをやっていく。仕組みというか制度というか、財政調整も含めてやっていくべきなんだろうと思

っています。

お答えになっていますか。

【時事】 ありがとうございます。その辺をやっぱり黒岩知事とお話したいという部分はありますか。

【市長】 そうですね、当然そういう話が必要なんだと思います。神奈川県内でも、昨日も講演でも言いましたけれども、6自治体が今現時点でも消滅可能性自治体とされているわけで、そここのところの広域自治体とされている県というのは、どういうふうこれから、その自治体に対する、いわゆる県の補完機能というものをどう發揮されていくのかということは、現時点でもそうですし、これからの新たな仕組みの中でどう位置付けていくのかと。まさに人口減少時代の中で、都道府県、本市で言うと神奈川県がどういう役割を担っていくべきなのかということは、本質的な話をしていかなければならないと思っています。ですから、そういう意味では、試算が云々かんぬんとかという話よりも、もっと本質的な話をしなければならぬと思っています。

【時事】 ありがとうございます。

【司会】 そのほか御質問いかがでしょうか。

神奈川新聞さん。

《市内における大学の開校について》

【神奈川】 神奈川新聞ですけれども、先ほどの読売さんの話に追加じゃないんですけれども、この人口減少時代の中において、新しいキャンパスが川崎に立ち上がるというのは、なかなか希有な例というか、珍しいと思うんですけれども、川崎に集まる理由みたいなものを市長はどういうふうに感じられていますか。都心に近いとかもあるかもしれないですけれども。

【市長】 正直、1つの要因ではなくて、ある意味、合わせ技1本みたいな話で、幾つかの要因を重ね合わせた結果、川崎の魅力というところに行き着いていただいたんだろうと思っています。ですから、すごく複合的要因だとは思っています。

【神奈川】 その中でも、特にみたいなのは何か。

【市長】 本当に、どれが一番とはなかなか言いづらい部分はありますが、やはり学生さんたちがいろいろなところから通いやすい交通の利便性ということもありましょうし、かなり御自宅から通う生徒さんも増えてきているとはいえ、住宅の確保のしやすさとか、あるいは住環境ですとか、周りの住環境だけじゃない周辺環境、それから、若者にとって魅力的なまちということ、様々な要因が考えられますが、そういうことが相まってだと思っています。

《健幸福寿プロジェクトについて》

【神奈川】 ありがとうございます。あと、先日、かわさき健幸福寿プロジェクトの表彰式のほうに伺わせていただいて、本当に要介護率が大幅に改善するという例がばんばん紹介された中で、市長が肝煎りで10年続けてきて、ある程度一定の成果がこの10年で、継続してやってきた意義がようやく花開いてきたのかなと受け取ったんですけれども、改めて、市長はここについてはどういうふうに。

【市長】 ありがとうございます。何かにやけてきちゃいました。すみません。

【神奈川】 そんなつもりはないですけれども。

【市長】 ありがとうございます。今回、10期目が終わったという段階で、第1期～9期の~~10年間やってきた~~平均が、やはり要介護度が改善した方というのが全国平均の約倍あるというのは、それは誇るべき成果だと思っています。

プラス、改善した方だけじゃなくて、大事なのは、長期間にわたって、その状況、ADLを含めて維持しているというのが、とても大事で。年齢重ねていくと、一般的なイメージだと、不可逆的に要介護度は上がっていく、ADLというのが悪くなっていくということから、維持するだけでも非常に大事なことだと思っていますので、総体的に見ると、非常に本市の取組は全国に波及させたい取組だと思っています。

やはり大事なことは、御利用者様もハッピーだということ、御家族様を含めてですけれども。それと何よりも、今、介護業界、非常に厳しい中であって、この取組に参加していただいた事業所には非常に意義があると思っています、離職率も下がっていると聞いています。そういった意味で、まさに三方よしの取組だと思うので、ぜひ、質の高い介護をやって、みんながハッピーになっていくというこの仕組みを、日本全国に普及できるように、より頑張らなくちゃいけないし、この成果をしっかり国のほうにもフィードバックしていきたいと思っています。

【神奈川】 聞いたら、福岡市さんなんかは、チャレンジしたけれども、3年ぐらいで頓挫してしまったというようなお話を聞きました。このプロジェクトの難しさみたいなのは、どういうところにあると考えられていますか。

【市長】 私どもの先行事例としても、一部自治体でやっていたところもあるんですけれども、これは特養とかの施設内介護だけに特化してという取組だったんですけれども、私たちは、いわゆるチームでやっていくということなので、まさにチームケアの、在宅でも施設でもという形で、どういった御本人に対して介護サービスがいいのかということをもみんなで考えるというチームケアを徹底していることが成果に結びついてきていると思っています。

それで、導入、ここに参加しませんかというお声がけをいただいているのが、やはりケアマネジャーさんの存在が非常に大きいと、データの的にも明らかです。ですから、ケアマネさんが意識を持って介護サービス事業者の皆さんのチームをつくってくださるという、この支援力、コーディネート力というものが成功の秘訣につながっているのではないかと考えています。

【神奈川】 ありがとうございます。

【司会】 そのほか御質問いかがでしょうか。よろしいでしょうか。

それでは、以上をもちまして市長記者会見を終了いたします。ありがとうございます。

(以上)

・この記録は、明らかな言い直しや言い間違い、質問項目など整理した上で掲載しています。

(お問合せ) 川崎市役所総務企画局シティプロモーション推進室報道担当